

介護保険が始まって今年で15年目。介護の社会化を目指したが、ここに来て国は、「地域」で「在宅」でハンドルの大きな切った。

核家族が進み、介護を一人で担う家庭が増え、独居者も多くなっている。介護者になったり、介護を受ける身になったり、人ごとではない現実がある。

介護保険がスタートしてから、認知症状の父親の介護をしていた。在宅でみた後、西宮市で介護を受ける本人や介護者、地域の人々が立場を越え、ご飯を食べながら思いを吐き出す場をつくった。12年間、多くの人たちと触れ合う中で、制度によって大きく変わったと感じることがある。

NPO法人「つどい場さくらちゃん」理事長

丸尾多重子

ビジネス化された介護保険

介護が「福祉」から「産業」へリハビリを指導した。それでも無と委わり、家族のお任せ体質に拍車がかかった。かつて介護は家族が引き受けるしがなく、在宅介護は当たり前だった。それを支えるシステムもあった。脳疾患などで入院すれば、在宅で生活できるよう、日数をかけて本人や介護者に

重視する「計算屋」となった。中には良い施設はあるが、職員の数や時間とカネをかけず、介護を単なる作業に終わらせている経営者も多い。収入源が介護保険料という特殊な業務に、企業努力などの危機感も感じられない。

一方、街中や自宅から高齢者が消えた。昔は近所の公園などにわざわざお年寄りがたくさん

いた。制度が始まると、朝夕に送迎車や街中を走り回り、お年寄りを運ぶ。安全、安心をうたう施設に送り込まれ、自力で歩ける人も転倒を恐れて車いすに乗せられる。自由はほとんどない。

つどい場では当初から、定期的な高齢者や介護者、介護・医療関係者で旅行に出掛けている。介護を受けていても普通に電車に乗り、お店で食事を楽しむ。さりげないサポートさえあれば、みんな笑顔になれる。

人生設計の中に、介護者になることも減らしている。

見る
思う



まのお・たえこ 大阪市生まれ。OJを経て東京で倉庫係の仕事に就く。その後実業に携り、10年間、父母と兄を在宅介護。介護現場の現場を知ってつどい場を設立。ボランティアに支えられ介護者の孤立を防いでいる。

制度は一体、誰を誰にしたのか。逃げるに何の意味かは、介護こそ人生そのものだとは分かるはずなのに。